2021 年 12 月 30 日

博士学位審査　論文審査報告書（課程内）

大学名　早稲田大学
研究科名　大学院人間科学研究科
申請者氏名　広瀬　由美子
学位の種類　博士（人間科学）
論文題目（和文）　越境的活動が成人の自律的なライフキャリア発達に与える影響
論文題目（英文）　Impact of Cross-Border Activities on Autonomous Life Career Development for Adults

公開審査会
実施年月日・時間　2021 年 12 月 3 日・15:00-16:00
実施場所　早稲田大学　所沢キャンパス　100 号館 210 教室

論文審査委員

	所属・職位	氏名	学位（分野）	学位取得大学	専門分野
主査	早稲田大学・教授	向後 千春	博士（教育学）	東京学芸大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	西村 昭治	博士（人間科学）	大阪大学	教育工学
副査	早稲田大学・准教授	尾澤 重知	博士（知識科学）	北陸先端科学技術大学院大学	教育工学
副査	早稲田大学・教授	日向野 幹也	博士（経済学）	東京大学	教育学

論文審査委員会は、広瀬由美子氏による博士学位論文「越境的活動が成人の自律的なライフキャリア発達に与える影響」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について 30 分間の発表があった。

1　公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

1.1　質問：これまでの研究で言われてなかった、あるいは逆のこと、常識に反していることはどこか。

回答：従来の研究において、越境的活動の重要性は指摘されてきたものの、どのような活動が個人の成長を促すかについて明確でなかった。また、多くの研究は組織での仕事経験に関連するものである。本研究では越境的活動のなかでも地域・社会貢献活動に着目し、ライフキャリア発達との関連を明らかにした点にある。

1.2　質問：5%水準を 0.5%と書いているところがある。単純な書き間違えか。

回答：書き間違えである。この点を修正する。

1.3　質問：なぜ、越境的活動に着目したのか。その理由が知りたい。

回答：企業に長く勤めている人ほど、組織の中でのやり方からブレークスルーできない状況がある。一方、先行研究に越境することで学びを継続できるという報告があり、越境活動関与者の意識･行動実態から得た知見を生かした支援を検討することで、成人の生涯学習を充実させる一助になると考えた。

1.4　質問：用語の説明で、越境の定義はどのようにしたのか。

回答：本論文では、越境的活動として職場以外での学習活動、地域・社会貢献活動、ネットワーク活動をとりあげた。ここで越境とは、職場など個人が主に所属・関与するコミュニティとは違うコミュニティとの交わりをもつことであるとした。この点は本論文に加筆する。

1.5　質問：ネットワークと社会貢献は共通しているのか。

回答：ネットワーク活動をする人と貢献を目的に越境する人は、いずれも自身の成長プロセスに意図的に関与する傾向があることが共通している。しかし、貢献活動の意向群では、より自身の能力を活かしたいとする点が違う。

1.6　質問：越境的活動の定義と根拠に関わるが、３つの活動（学習、貢献、ネットワーク）をなぜ導いたのか。また、３つが重要だといいたいのか、地域･社会活動が重要だといいたいのか。

回答：先行研究に記載した石山（2018）では、貢献活動や異業種交流が職場業務改善を促すとして、活動の成果が職場に還元されることに着目している。本研究では個と社会の両側面からライフキャリア発達に影響を及ぼすのかに着目し、３つの活動について調べた。なかでも地域・社会貢献活動への関与はライフキャリア発達に与える影響が大きい、つまり重要な活動だと考える。

1.7　質問：研究１の対象者は、正規と非正規雇用者など、流動性の高い人とそうでない人が混ざっている。職場の定義について研究の限界を言及するべきである。

回答：ご指摘のとおりである。これは本論文の限界として加筆する。

1.8　質問：研究３の越境的活動と研究１と研究２との定義が違う。その点をどう統合的にとらえているのか。

回答：本論文の目的である生涯学習のあり方を踏まえたライフキャリア支援の検討をするため、研究１と研究２のオンライン調査に加えて、研究３の実践調査を行うことで、越境的活動の省察効果と支援施策を統合的にとらえる研究になると考えた。

1.9　質問：他者の資源を使うことを考えると、交換的なリーダーシップ（Give＆Take）しか入らなくなる。越境してたまたま知り合った人と社会的意義のある共通のゴールを目指すということは起こりにくいのではないか。

回答：越境には想定していないこと、つまり非規範的視点が得られる。そこにおもしろさがある。また、自己成長主導性を事前に高めておくことは越境的活動を自身の成長により生かすことができると推察する。そのためには、越境的活動を行う前から、自身と他者の両資源を活用する意識の醸成が必要だと考える。この点は今後の展望に加筆する。

2　公開審査会で出された修正要求の概要

2.1　博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

2.1.1越境の定義において、職場とコミュニティの関連について補足する。

2.1.2職場の定義に関連し、研究１の対象者について研究の限界に言及する。

2.1.3越境前から自身と他者の資源の両要素を意識することの必要性について、今後の展望に加筆する。

2.2　修正要求の各項目について、本論文最終版では以下のとおりの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。

2.2.1越境の定義において、職場とコミュニティの関連について「1.2 先行研究」に加筆した。

2.2.2職場の定義に関連し、研究１の対象者について研究の限界が伴う旨を研究１の「2.4 本章のまとめ」に加筆した。

2.2.3越境前から自身と他者の資源の両要素を意識することの必要性について、「5.2 今後の展望」に加筆した。

3　本論文の評価

3.1　本論文の研究目的の明確性・妥当性：本論文は、成人の自律的なライフキャリア発達を目指し、越境的な相互作用が省察を促すことを明らかにすることで、生涯学習のあり方とそれを踏まえたライフキャリア支援の方法を検討することを目的とする。日本では少子高齢化が急速に進み、労働を取り巻く環境は大きく変化している。日本型雇用システムにおいて個人は特別な強いキャリア意識を持たず、自ら学ぶことに慣れていないことが問題とされる。このため、成人のライフキャリア支援と生涯学習は現代社会の重要なテーマであり、本研究の目的はそれに合致する妥当なものと判断できる。

3.2　本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本論文では、越境的活動関与者の意識･行動についての探索的および定量的調査から得た示唆を踏まえてライフキャリア学習プログラムを開発している。また、プログラム評価には、ライフキャリア発達の指標として妥当性と再現性を確認した自己成長主導性を用いている。さらに開発したプログラムの実践調査をとおして、企業勤務者では自営業者が混じるというメンバーの多様性が、自己成長主導性のなかでも「資源の活用」に影響を及ぼすことを示すなど、各々の研究のつながりが妥当なものとなっている。データの分析方法については、先行研究等で適切とされる手法で解析されていることから、本論文の方法論も妥当なものと判断できる。

なお、本論文における研究１（調査３）、研究２、研究３は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会（承認番号：2018-281　2019-004）」に基づき実施されており、倫理的な配慮が十分に為されていると評価できる。

3.3　本論文の成果の明確性・妥当性：本論文では、「新しい経験に開かれた姿勢」や「成長を促す関係性」がライフキャリア発達を促すモデルを先行研究から導いた上で、メンバーの多様性による差異を意識することで「成長を促す関係性」の認知が促

されることを示している。これらの知見は、本論文の目的と合致しており、キャリアと生涯学習の先行研究と照らし合わせても、新たな示唆として妥当である。

3.4　本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。

3.4.1 本論文では、積極的な学習行動をとる人ほど、越境的活動に関与していることを示した上で、特に地域・社会貢献活動の意向群では自身の経験・能力活用が行動への鍵になることを見出している。

3.4.2 本論文では、自己成長主導性「資源の活用」には自己と他者の資源があることに着目し、ライフステージ別の特性を示した。加えてキャリアプログラムの実践をとおしてメンバーの多様性による差異が、「資源の活用」の変容に有効であることが示されている。これらの点は、従来にはない新たな視点であり、本研究の新規性として評価できる。

3.5　本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 本論文は、個と社会の両側面の観点からライフキャリア発達を促進するための新たな知見を提供しており、この点において学術的意義があると考えられる。

3.5.2 本論文は、成人の生涯学習をともなうライフキャリア発達に貢献できる具体的な知見を提供しており、この点において社会的意義があると考えられる。

3.6　本論文の人間科学に対する貢献：人生百年時代における成人のライフキャリアと生涯学習は、人間科学において重要な課題である。本論文では、生涯学習の一環として成人のライフキャリアを位置づけ，その発達を促進する要因として越境的活動に着目し、かつ、それを促進するための新たな知見を示しており、人間科学に対する貢献が高いと考えられる。

3.7　不適切な引用の有無について：本論文について類似度を確認したうえで精査したところ、不適切な引用はないと判断した。

4　学位論文申請要件を満たす業績（予備審査で認められた業績）および本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

・広瀬由美子（2019）自己成長主導性が成人のライフキャリアに及ぼす影響．しごと能力研究，7：65-91

・広瀬由美子（2021）地域・社会貢献活動への関与と学習行動との関連－自律的なライフキャリア形成と生涯学習の視点からの検討－．キャリアデザイン研究,17：77-86

5　結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以上